

Sigrid Nunez: 『私』の中の外国人

杉浦悦子

ジークリード・ヌネ (Sigrid Nunez) は1951年にニューヨークに生まれ、現在もニューヨークで執筆を続けている。バーナード・カレッジでBA、コロンビア大学でMAを取得、『スリーペニー・レビュー』『フィクション』『アイオア・レビュー』『サルマグンディ』各誌に短編を発表。プッシュカート文学賞を2回、GE基金賞などを受賞している。中国系パナマ系の父親について語った「チャン」という短編がアジア系アメリカ文学のブームの中で特に注目され、いくつかのアジア系作家のアンソロジーに収められたので、アジア系アメリカ作家の一人としてデビューしたことになる。

1995年、ヌネはこの「チャン」を含めた4編の短編からなる *A Feather on the Breath of God* (『神の息に吹かれる羽根』) を発表している。¹ この作品は、アメリカ移民の家庭に育った若い女性の自伝という形式で語られ、4つの章からなっている。第1章「チャン」では、中国系パナマ系の父親のことが語られる。第2章「クリスタ」では敗戦国ドイツからアメリカに来た母親クリスタのことが語られる。第3章では、ニューヨークの公営住宅の貧しく不安な移民の家庭で育った語り手自身の少女時代が語られている。少女はバレエに打ち込んでいるが、始めるのが遅かったこと、経済的なことで、その夢は挫折する。第4章では、成人し、移民のための英語の教師になった語り手と、ロシアからの移民との短い恋が語られる。

さらにヌネは1996年には *Naked Sleeper* を、² 1998年には *Mitz: The Marmoset of Bloomsbury* をと、³ 次々と発表している。80年代以降とくに、アジア系アメリカ作家の活躍が注目されており、ヌネもその時流の中で文学界に登場したのではあるが、彼女の書くものには、「アジア系」という主張はそ

れほど強くは見られない。むしろ彼女は、アジア系に限らず、また場面もアメリカに限らず、異邦人の母語の喪失、母国の喪失の悲しみを一つ一つ取り上げ、語り手の記憶を通して書くことに力を注いでいるように思われる。

1999年、ヌネは手紙の中で進行中の第4作について、「多くの読者は『神の息に吹かれる羽根』を思い出すでしょう」と予告している。2001年、それは『ルーエナのために』として発表される。⁴そしてこの最新作は6年前の作品への言及で始まる。

私の最初の本が出ると、私は何通かの手紙を受け取った。(FR, 3)

第1作へのこのような言及は、この物語を語るのが彼女の第1作『神の息に吹かれる羽根』の名前のない語り手『私』と同じ語り手であることを示している。第2、第3作では、第1作の主な場面となったスタテン島から離れて、マンハッタンやロンドンを場面にして書いたヌネだったが、この作品では6年ぶりマンハッタンとともにスタテン島を場面に取り上げている。『私』が生まれ育ったスタテン島にある低所得者用の公営住宅、そこはマンハッタンと目と鼻の先なのだが、『私』はそこに何年も戻っていない。『私』にとってそこは棄てた故郷、記憶の底に押しやった嫌悪すべきところではあるが、同時にその嫌悪の気持ちと相反する懐かしさを抑えがたいところでもある。物語の中で、現在はマンハッタンに住んで小説を書いている『私』は何年ぶりかでそこを訪れる。この物語はスタテン島での幼少期を共有するルーエナ・ジシンスキーというポーランド系移民の娘の物語であるが、同時にスタテン島の（公営住宅の）物語でもある。ある意味で、マンハッタンとスタテン島の往還の物語でもある。

また、ヌネは第1作に言及することによって、『ルーエナのために』を第1作の文脈で読むように読者を導こうとしていると思われる。『神の息に吹かれる羽根』は、アメリカ人として生まれ、生得権としてアメリカの市民権を持つ『私』が、そして、英語を第1言語とする『私』が、自己に内在する外

国人に目覚め、英語を第1の言語としないために自由に使いこなせない外国人——父親チャン、母親クリスタ、恋人ヴァディム——の、伝記（life: 身の上、生涯、外国人としての生き方）を書くにいたる物語である。彼らの言葉にしようとしてできなかったことを通訳する作家になる物語である。

『私』に内在する外国人とはどのような存在であろうか。本論では語り手としての『私』のうちに生きるもう一人の『私』、外国人について、そして、それが『私』の書くという営みにどのような力を与えているかを考察するつもりである。さらに、二つの作品に描かれるマンハッタンからスタテン島、この二つの地点のあいだの『私』の往還が『ルーエナのために』の誕生にどのような意味を持っていたかもつまびらかにすることになるだろう。

スタテン島 公営住宅 アメリカの中の外国

スタテン島は、ニューヨーク湾の中、マンハッタンの南端から1マイルも離れていない位置に浮かんでいる。マンハッタンからは、バッテリーパークーセント・ジョージ間を往復するフェリーで25分の距離である。また、ブルックリン・クイーンズ高速道路を使いヴェラザーノ・ナロウズ橋を渡ればさらに容易に行くことができるが、橋ができる前はもっぱらフェリーに頼らなければならなかった。『私』は『神の息に吹かれる羽根』と『ルーエナのために』で、スタテン島にあった公営住宅での幼年時代を繰り返し描いている。そこは、アメリカの周辺、アメリカの内部に入ることを拒否された人々、あるいは待たされたをかけられた人々が、狭いアパートメントにひしめき合い、いがみ合いながら生きているところ、アメリカの繁栄とは無縁なところだった。そこは外部の人々から見れば外国人や社会の底辺に位置する人々が住む危険なところだった。またそこに住む人にとっても、永住の土地ではなく、とりあえずたどり着いたアメリカのいわば仮の住まい、一時的な腰掛であった、いつかその外に出て、外の世界、アメリカの社会に溶け込んでゆくべきところだった。

第4作では、公営住宅にいたころのルーエナがロロと呼ばれていたことに

気づいた『私』は、衝撃的な場面を思い出す。公営住宅内の遊び場で、ほとんど裸の少女が、ベルトを振りかざす父親に追いかけて、悲鳴を上げながら逃げ惑う場面である。ポーランドから移民してきた父親は、豊かなアメリカで仕事を見つけることはさほど困難ではないものの、定職に就くことができず、未熟な労働者として、そのために低賃金で、職場を転々としている。職場や社会への不満の捌け口はいきおい家庭ということになる。時には妻や子供に暴力を振るう。あるいは酒に溺れる。その妻も原因不明の無力感に襲われ、一日中家事もせず、夫が帰宅する直前までベッドで寝ている。この両親が陽気な顔を見せるのは、酒を飲んでいるときだけである。家事の負担を一手に引き受けるのは小学生の口口ということになる。この夫婦が「黒人」といって軽蔑するジョン家では、仕事から戻った父親が、ほとんど裸でやはり幼い娘に足を洗わせることを習慣にしている。そして、ジョン夫人がジシンスキー夫妻の飲酒や喫煙に批判的な態度を見せれば、ジシンスキー夫人は黒人のくせにとののしる。ジシンスキー家やジョン家はほんの一例にすぎない。幼い子供が背骨を折るほどの過重な家事をやらせる親たちもいたし、生活保護を受けてその日暮らしをしている人もいた。狭い家に大人数でひしめき合って暮らしている家族もいた。そして、家庭内の絶え間ない争い。一番の被害者は子供たちだ。「公営住宅の安らぎのない家庭。夫婦は絶え間なく相手の喉につかみかからんばかりにしている。子供たちは怯えきっている。大人たちは自分を欺くことができるかもしれない。だが子供たちはごまかせない。お父さんとお母さんは相手を殺したがっている」(FBG, 126) 『私』はまた子供たちの身に起こった悲惨な事故を思い出している。交通事故、盲目で口もきけない少女の身に起こった地下室での奇妙な怪我。「事故は起こった。神は小さい子供と酔っ払いを守ってくださるということわざは嘘だった」。(FBG, 109) レンガ職人のディーンさんはハンブティダンブティのように壁から墜落して、歩けなくなった。事故は起こるものだというのが皆の了解事項だったし、また「雷は二度は落ちない」ということわざも通用しなかった。ディーンさんは麻痺した足が車椅子の脚には

さまれるという事故に見舞われる。(FBG, 109)「私の子供時代には絶えない暴力、喧嘩、癩癩、罰の記憶が垂れこめている。その時代を通して、脅しと呪いの言葉が鳴り響いている。どうしても逃げ出さなくてはならなかった」(FBG, 90)

だが、スタテン島の『私』が幼少期を過ごした公営住宅は、現在思い返してみると、施設としてはそれほど悪いところではなかった。まだ新しく、よその公営住宅に比べればはるかに清潔で、安全だった。たいていの人が玄関のドアの鍵をかけなかったし、地下の物置には自転車や乳母車を置いておくことができた。ゲッターでもスラムでもなかった。にもかかわらず、住民にとってそこは「ほかを選ぶ余地があるのなら、住みたくないところだった」(FR, 51) し、だから永住の場所ではなかった。誰しもが公営住宅の外にある一戸建ての家に憧れたのだ(たとえどんなにささやかな家でも)。(FR, 50) 公営住宅の子供たちは尖った屋根と煙突、庭と木のある家の絵を描いた。『私』の母クリスタがアメリカに、続いて夫に失望した大きな原因は公営住宅にあった。彼女は敗戦国ドイツに駐留するアメリカ軍の兵隊チャンと結婚したのだが、彼に欺かれたという気持ちを抱いている。「あなたのお父さんは小さな庭付きの家をほのめかしていたのよ」(FBG, 53) 『私』の母ばかりではない。公営住宅の住民のほとんどが、いつかそこを出てゆくことを夢見ている。「私たちはここの人間ではないという確信、ほかの人と同様に、母はこの確信を持っていた」(FBG, 37) そして、近所の家族が公営住宅の外に越してゆくと、『私』の母は「まっとうな人は出てゆくのだわ。私たちは最後まで出てゆけないでしょうね」(FBG, 37) と嘆く。「すぐにも出てゆけなければ、私は気が変になってしまうわ」(FBG, 87)

公営住宅は故郷にはならない。そこは人生のほんの一時期住むところであって、永住の土地ではない。そこでの生活は放浪の、移動の一部に過ぎないのだ。公営住宅を特徴づけているのは、この移動性、「この者ではない(don't belong here)」の感覚である。この土地を故郷とは思えない、ここを一つの異郷とみなす感覚である。あるいは「どうしてここに来たのかしら」

(*FBG*, 72) という感覚、ここにいるのは間違いだという、悪い魔法にかかっているのだという感覚である。(*FBG*, 37) ホームレスの感覚、ディアスポラの感覚である。だから、いったん公営住宅を後にした人は、二度とは戻って来ない。故郷ではないのだから。

いったん引っ越してしまうと、たとえニューヨーク内を移動したに過ぎない場合でも、奇妙なことにスタテン島の名前は二度と話題に上らなかった。スタテン島の出身者に会うこともなかったし、島に知人がいる人も、島に行ったことがある人にもめぐり合うことはなかった。(*FR*, 48)

だが、公営住宅は間違いだという感覚は、中に住む人々ばかりでなく、外部の人はもっと強く感じている。彼らは公営住宅に対して偏見を抱いている。レイプや殺人の噂がまことしやかに語られる。(*FR*, 50) 公営住宅の敷地を横切らない、どんなに遠回りになっても、迂回してゆく。これが外部の人々の鉄則だ。タクシーの運転手も行き先が公営住宅だと知ると、断ることがある。学校の友人を招いても、「お母さんが行かせてくれないの」と言って、訪ねてこない。外部の誰かが来るとすれば、それは男子学生がクラブに入る資格を得るための肝試しに、土曜の夜一人で敷地を通り抜けるときだ。(*FR*, 52) 『私』の友人は一緒にスタテン島に行こうと言ってくれるが、「予防注射をしてからにしてね」と付け加える。(*FR*, 68) 公営住宅に住む人にとって、そこにいるのが何かの間違い、悪い魔法であるように、外部の人にとってもそれはそもそも、本質的に「間違い」なのだった。(*FR*, 51)

「間違った」公営住宅の住民は、何かすぐにそれとわかる異質なものを身につけているらしい。まだ小さい『私』は近道をしようとして、他人の家の敷地に入り込んでしまう。すると、どこからともなく棒を持った二人の人物があらわれ、「自分の居場所に戻り、そこから出て来ないように」と言われる。口には出さなかったが、一つの疑問が胸にのしかかる。「どうして私たちの居場所がわかったのかしら」(*FR*, 50) 外部の人——普通のアメリカ人

—の目は、公営住宅の住民票が烙印のようについているのを見逃さない。それは何なのか。にじみ出る貧困や不幸、不安なのだろうか。彼らが抱えている不満だろうか。たしかにある者は移民してきたばかりで、英語が話せないかもしれない。エキゾチックな服装をしているかもしれない。だが、それならば、変わった服装をした者、貧しい者はマンハッタンにも、アメリカのほかの場所にも、多くいるはずだ。彼らをアメリカ人（本物の？）と区別するものが何なのか、特定することは難しい。だが、公営住宅を特徴づけるのは、その現実的な貧困や汚辱、希望のなさよりも、それがアメリカの中にありながら、アメリカ社会の外に、あるいは周辺に隔離されているということである。そういう意味で、そこはアメリカの中の外国なのだ。その住民が烙印のように身につけているのは、その異邦性、非アメリカ性であることを、そしてそこがアメリカの中の象徴としての外国であることを、ヌネは語ろうとしているのである。

夫が手に入れることができたのが公営住宅でしかなかったというクリスタの失望は、その建物としての、あるいは街並みとしての質ではなく、そこが本当のアメリカではないという点にあった。アメリカ兵としてドイツに進駐してきたチャンとともに、真の意味でアメリカに入ることを拒否されたからだ。故国ドイツを棄てた代償として与えられるはずのアメリカでの家郷が拒まれたからだ。

マンハッタンへ 外国人性の棄却

『神の息に吹かれる羽根』の語り手は、『私』がごく幼いとき、父親が中国語を話すのを初めて聞いたコニーアイランドへのピクニックの思い出から語り始める。偶然に道で出遭った4人の中国人と父が中国語で話すのを聞いた『私』は、このとき初めて父親が中国人だったということを悟るのである。それ以前も以後も父親は滅多に中国語を話すことはなかった。その限りにおいては、父親は英語もほとんど話さなかったのだが。

このエピソードは『私』の初めての外国人としての目覚めを物語っている。

パナマ系中国系の父親とドイツ系の母親に育てられた『私』は、父親の風貌がほかのアメリカ人と違うことも、寡黙であることも、貧しさも、低い賃金を補うための長時間の労働も、母親のドイツ語なまりの妙に文法的に正確な英語も、全て当然のこととして受け止めていたわけで、このときまで、両親がアメリカの中の外国人であることに気づくことはなかった。両親の家、スタテン島の公営住宅が幼い『私』の世界であり、それがすべてであった。

父親が中国人だということを知らされていなかったわけではない。

そうか、それじゃあ本当だったんだ。お父さんは本当に中国人だったんだ。そのときまで、私は心底から信じてはいなかった。(FBG, 4)

ただその異質性に気づくには、外の世界から見直さなくてはならなかった。ある意味で、『私』はこのとき外の世界に入ったのだと、言えるかもしれない。あるいは、異邦性を与えられたと、あるいは、『私』もアメリカの中の外国人になったのだと。

この本の3章「神の息に吹かれる羽根」はほかの三つの章と少し違っている。ほかの三つの章が移民一世の世代である両親と恋人に当てられているのに対し、最も短いこの章は、思春期の『私』自身に振り当てられており、自伝的形式をとっている。

この章では、『私』はバレエに打ち込んでいる。12歳から16歳のあいだ、『私』が夢中になったバレエの世界は、彼女が住む公営住宅の両親の世界とは別世界だった。公営住宅の貧困、不条理、混沌、砕かれた願望、失われた理想。それに対してバレエの世界は純粋な美の世界である。

バランス、シンメトリー、動き、形が、一言で言えば芸術がそこにあった。(中略) そのときまで私は公営住宅の外の世界はあまり見ていなかった。だが、私にも一つだけ確信を持って言えることがあった。それはバレエの世界は公営住宅の世界と対極をなすということだった。(FBG, 98)

短い間だったが、バレリーナとして私は信じることができた。世界は単純な場所だと。むき出しで幾何のように明解だと。バランス、シンメトリー、動き、形。純粋な心。意志。精一杯に努めなさい。美しいものにしなさい。(FBG, 116)

このようにバレエの中に純粋な美を見出す『私』は、バレエの美が肉体を通じて表現されるものであるにもかかわらず、その肉体性を排除するまでになる。『私』がバレエの持つ性的な部分に目をつぶろうとするのもその一つの表れである。(バレエに性的なものを見出すことができなかつた『私』は、何年も経ってからバレエが性そのものであることに気づく。) さらに『私』は、完成されたバレエの理想の体型を求めて、毎日何度も体重計にあがっては体重を調べ、食物を極力食べないようにするまでになる。

『私』はほかのバレエの生徒——背の高いブロンドの少女、『私』の憧れの少女の一人——の言葉に感銘を受ける。

「食べると思っただけで少し吐き気がするくらいにまで自分をもってゆかなくてはいけないの。(中略)自分でそういうふうに見えることができるのよ。自分にそう言い聞かせるの」彼女は肋骨の下のくぼみを撫でながら言った。(FBG, 103)

どうすれば食べると思っただけで吐き気を催すことができるようになるのか? もう一人の妖精のような少女は語る。

食べ物を見て食べたくなったときは、一旦口に入れたらそれがどんなものにも変わるか、真剣に考えることね。本当に思い浮かべるの。そうすれば食欲をおさえるのが楽になるわ。(FBG, 103)

早々この絶食法を体得した『私』は、りんご一個とキャンデー・バー一本し

か食べずに済ませることができた日は（不健康な食事）「床につくときは吐き気と目が眩むような頭痛がしたが、同時に勝利の喜びもあった」と言うまでになる（不健康な快感）。(FBG, 105) そして、このように軽い体を追求してゆくと、その究極には肉体を持たない体、限りなく魂に近い羽根のような存在にたどり着くことになる。

くぼんだ腹部、突き出した骨のなんと美しいこと！ 羽根のように軽くなること、魂のように軽くなること——「神の息に吹かれる羽根」（聖ヒルデガルド）(FBG, 106)⁵

『私』がこのようにバレエの世界に没頭するのは、彼女自身が認めているように、バレエに現実の世界を拒否する一つの方法を見出したからだ。

バレエの世界にあるものはなにもかもが、現実の生活からの逃避を願っている少女の願いに応じてくれた。バレリーナを包むこの世のものは思えない、尼僧のような雰囲気。(FBG, 98)

どこからどこへ逃避するのか？ 『私』は「尼僧のような」と語る。少女は尼僧のように自分の肉体性を否定し、ひたすら魂に近づくことを願っている。だが同時に『私』のバレエへの耽溺には、スタテン島の公営住宅からマンハッタンへと逃避したいという願望が分ちがちが入り混じっている。『私』の俗世から聖なる世界への逃避の願望の裏には、両親の家を捨てて、外国人を、そして自らの外国人性を切り捨てて、マンハッタンが象徴するアメリカ人になりたいというひそかな願望が結びついている。バレエを通して、芸術を通して、『私』はアメリカ人になろうとしているのだ。

なによりもバレエは逃避を意味していた。放課後家に戻らずに、レッスンに行くことができた。レッスンでは自分の臆に意識を集中すること

で、望みのない両親のことをすっかり忘れられた。それにマンハッタンのなかに行くのは心踊ることだった。わたしはそこが好きだった。そしていつか自分はここに定住しよう（ここを自分の「ホーム」にしよう）と思った。（中略）私は芸術が差し出している奇跡的な可能性を発見した。世界の一部になること、そして同時に世界の外に出ること。（*FBG*, 100）

「世界の一部になること」、それはバレエを通して、アメリカに受け入れられること、アメリカ人になることを意味している。「世界の外に出ること」、これは、惨めな現実世界から逃避すること、そして、『私』にとって現実とは、公営住宅、両親の家、なかんずく、その外国人性である。バレエ、美の世界、アメリカ、マンハッタン対外国人、両親の世界、スタテン島、公営住宅という関係は、『私』がバレエ教室の友人ポーシャに対して抱いた気持によく表されている。

ポーシャの裕福な家庭は、『私』が憧れるアメリカそのものである。ガードマンのいる豪華なアパートメント、その家の豊かな暮らしぶり、居心地良く整えられた調度に『私』は目を見張る。また『私』は人々の話し声にも耳を傾ける。公営住宅でいつも訛りのある英語、貧困が原因（と思われる）とげとげしくいがみ合う言葉を聞きなれた『私』の耳には、ポーシャの家の人々の話し声は別世界の言葉のように聞こえる。人々は「ダーリン」という言葉を連発し、よく笑う。そこにいるのは不安も不自由もなく暮らしている人々である。ポーシャの両親は演劇界の有力者でもあり、彼女自身はさほどバレエに優れているわけではないにもかかわらず、彼女には将来が約束されている。ポーシャの特徴はなんといっても自信であると、『私』は観察する。

ポーシャの両親は公営住宅から来た娘の友達を鷹揚に迎え入れる。これも自信の表れであろうか？ 母親などはポーシャと『私』のことを客に向かって「あの子達、小さな宝石みたいでしょう」と言ってくれる。だが、この自信に満ちた鷹揚な家族が外国人性を見逃すというのではない。母親は『私』が中国系であることをすぐに見抜いている。

誰かがユダヤ人かどうか確かめたかったら、その人がヤムルークを被ったところを想像してみればいいの。あなたのお友達（『私』）には、ちょっとキモノを着せてみたの。（*FBG*, 107）⁶

この家の中国人の料理番の女性をポーシャの母親が友人に「貸した」という表現を聞いて、自分の父親のことは黙っていようと決心していた『私』にとっては（*FBG*107）, 少なからずショックだったと思われる。

先にも述べたように、外国人であるということは、まだ無意識の幼年時代の『私』の世界をなしており、『私』の存在を生み育んだもの、その存在の根源をなすものであった。公営住宅の敷地、いわばアメリカの中の外国に生まれ育った『私』は、自分が外国人であるということに無意識であった。だが無意識であればこそそれは『私』の本質的な部分に深く関わるものであった。バレエに打ち込んだ思春期の数年間を書いた「神の息に吹かれる羽根」の章は、外国人であった少女が、外国人性をその存在の根源に持つ少女が、成長しアメリカ人になるために（アメリカ人として成長するために）その外国人性を棄却しようとする一つの過程として読むことができる。（世界から出ること、そして世界に入ること：すなわち外国人の世界から、アメリカに。アメリカの周辺からアメリカの内部に、だから、スタテン島の公営住宅からマンハッタンに）

バレエの教室から家に帰るのに2時間近くかかった。私が宿題をすることができるのは、地下鉄かバスに乗っているときだけだった。週日は家に帰るのは朝家を出てから12時間後だった。（中略）私は父と食事をした。そそくさと、無言で。それからたった二つしかないタイツを洗い床に就いた。あのころは家族からずいぶん気持ち離れていた。大学に進学して家を出たときよりも離れていたくらいだ。（*FBG*, 102-103）
（傍点筆者）

『私』が公営住宅からマンハッタンに行くのに2時間かけて乗った地下鉄やフェリーは、母親の胎内から外界へと続く道、細くて暗い産道を連想させはしないだろうか。『私』は両親、とりわけ父親との繋がりを拒否する。父親の目からは誇らしいほどに美しく成長してゆく娘、しかしその娘は父親を、その外国人性を拒否し、頑なな顔を見せている。娘の話す英語は父親にとっては外国語である。「父がわたしたちに異邦人に見えたように、わたしたちも父の目には異邦人のように映っていたにちがいない」。(FBG, 23) やがて父の死後、『私』はこのときの自分の態度、特に無言だったことを後悔する。「毎晩父と二人きりだったときに、いろいろと聞いておけばよかった。そうすれば答えのない疑問を持たずに生きてゆくことにはならなかったのに……」(FBG, 20) だが、この時期、『私』は精一杯に両親とのつながりを断ち切ろうとする成長の一つの段階にさしかかっていたのだ。

それは苦痛を伴う成長でもあった。空腹と疲労、育ち盛りの少女の足にとって不自然で無理なトウシューズから来る痛み（自然な身体を否定し、美しいとされる人為的な形に自己をたわめる）、そういった肉体的な痛みによって、その苦痛は表現されている。だが、その肉体的苦痛よりももっと深いところで、『私』は自分の命の核に近い部分を棄却する痛みを覚えていたはずである。『私』が棄てようとしている『私』のなかの外国人、それはまさしく命の組織を織り成すものなのだから。いまだ世界の内外の区別がつかなかったころ、『私』を包み育んだものなのだから。と同時に、社会の隅に押しやられている両親、既に社会から棄却されている外国人である両親を自分が二重に棄却することに苦痛を覚えていたはずである。

『私』の食べることへの拒否がバレエへの傾倒に含まれているということは、彼女がバレエを通して棄てようとしているものが、実は彼女の命と関わるものだったことを示している。命に深く関わるものは、「世界は単純な場所だと。むき出しで幾何のように明解だと。バランス、シンメトリー、動き、形。純粋な心。意志」(FBG, 116) というバレエが表現する美と対極をなす。むしろ不定形で不純で混沌とし、どろどろとしているものだ。咀嚼され、消

化された食べ物のように。そしてさらにそれが体外に排泄されたときの悪臭、『私』は食べ物のおぞましい側面を意識的に強調して拒食する。

食べることがおぞましい習慣だという感覚は、食物は不純だという感覚は、幾度もよみがえった。しばらくの期間わたしは歯を磨くときでさえ必ず嘔吐感に悩まされたし、どんなに努力しても、嫌な食べ物が「どんなものになるか」想像せずにはいられなかった。(FBG, 106)

アメリカの市民権を持つパナマ系（ということはスペイン系でもある）中国人やドイツ人、周囲にそぐわない風貌、中国語でもドイツ語でもない曖昧な言葉、後にしてきた国にもアメリカにもどちらにも帰属しない曖昧なアイデンティティ、アメリカの中の外国人、これもまた不定形で不純で混沌とした存在である。しかも、それが『私』なのだ。それは『私』のなかに、『私』の命の中に織り込まれている。意識的に食べ物を嫌悪し、拒絶するように、『私』は自分の中の外国人を嫌悪し、棄却しようとする。アメリカ人になるために。スタテン島の公営住宅に象徴されるアメリカの中の外国から出て、アメリカに入るために。

『私』の中の外国人

「あなたはぼくのアメリカだ」(FBG, p.147)

『神の息に吹かれる羽根』の第4章「移民の恋」で、オデッサから移民してきたばかりのヴァディムは覚えたての英語で、『私』にこう言う。語り手の少女は成長し、今では移民のための英語学校の教師をしている。その『私』がヴァディムにはアメリカそのものに思えるのだ。いわばまだアメリカの周辺に吹き寄せられてきたばかりのヴァディムの目には、『私』は国境から遙か離れたアメリカの中心部にいる人に見えるのである。たしかに、『私』

は今アメリカ人として、英語を教えている。公営住宅を出てマンハッタンで暮らしている。ヴァディムが低い賃金で汗水たらして働いているとき、移民の生徒たちがおそらく生涯に1,2回しか行かないようなレストランで、同僚と冷たいマルガリータを飲んでいる。ヴァディムはずっと後になって『私』から聞かされるまで、彼女がアジア系移民の娘であることに気付いていない。

だが『私』は本当にアメリカ人になったのだろうか。『私』は『私』の中の外国人を棄却しえただろうか。あるいは『私』はそれを棄却することができずに、自分の内奥深くに抑えこんだのではないだろうか。『私』がアメリカ人として生きるために棄てようとして棄てそこなった外国人、それは『私』の中に潜むもうひとりの『私』なのではないだろうか。というのも、成長してアメリカ人になった『私』は、ロシアからの移民との恋に陥るのである。後になって『私』はヴァディムのことを振り返り、「私は心を奪われた (ravished)」(FBG, 180) と言っている。何故だろうか。妻子ばかりか孫もいる年の離れたロシアからの移民、平気で飲み物の缶を道路に棄てるような生活習慣のまったく違う自分の教え子、暴力、アルコール中毒、麻薬、売春、さらには義父殺しの疑いなど後ろ暗い過去を持つロシアからの移民に、何故これほど心を動かされたのだろうか。しかも『私』はこの得体の知れないところのある男に恐れを抱きながら、心を奪われてゆくのである。この恐怖と魅惑の入り混じった感情は、何に由来するのだろうか。それは、『私』の中のもう一人の私である外国人が、アメリカの外国人であるヴァディムによって目覚め、彼に答えるからだ。その『私』の中の外国人は、『私』が多大な苦痛の代償を払い、意識的に嫌悪して棄てたはずの彼女の一部、否、本質、命に近い部分なのだが、そうであればこそ、それは強い力を持って彼女に呼びかけ訴える力を持っている。

ヴァディムが手に入れた公営住宅はスタテン島ではなくブルックリンにあるのだが、ここでもかつての『私』たちの暮らしが繰り返される。周囲にもロシアからの移民が多く住んでいるその公営住宅で、ヴァディムとそ

の妻と娘、姑、妻と前夫のあいだにできた息子とその妻、2歳の男の子、都合七人がたった一部屋のアパートにひしめき合って暮らしている。貧困、不安、不自由な言葉、そして、自分はここのものではないというディアスポラ感覚、ここを出て行きたいという焦燥、外部からの差別、偏見、アメリカの中の外国の暮らしが全てここで繰り返される。

ヴァディムの中では、英語を習得することとアメリカ定住に成功することが、英語の先生を恋人として獲得することと分かちがたく結びついている。彼はクラス一番の熱心な生徒になると同時に積極的に求愛しはじめる。そしてわずか3ヵ月もたたないうちにヴァディムは計画どおりタクシーの運転手としてニューヨーク市内を走り回れるほど英語を習得し、生活の安定の見通しもつける。そしてその短いあいだにヴァディムと『私』の「移民の恋」が始まり、終わる。

『私』が惹かれるのはなにかんづくヴァディムの言葉である。「わたしたちを引き寄せたのは、なによりもまず言葉だった。彼が話すのを聞くとわたしはいつでも心を動かされた」(FGB, 164) 移民の言葉、訛りの強い、ブローケンで単純な英語、それが、『私』に訴えるのだ。『私』の中に潜んでいた外国人が、ヴァディムの言葉によって目覚め、誘惑を覚えるのだ。アイロニカルなことであるが、ヴァディムにアメリカとして求められた『私』は、実はアメリカ人としてではなく外国人として彼に答えるのである。

彼の訛り、ブローケンな言い方、ゆっくりと英語を習得してゆく過程、こういったことすべてがわたしには大事だった。彼の進歩を見守ってられないこと、……自分の言いたいことがなんでも言えるようになったときそばにいられないことを、わたしは残念に思うだろう。(FGB, 164)

そして、二人の言葉には翻訳という特徴が顕著に見られる。ヴァディムはいつも辞書を片手に電話をしてくる。

「マイ・ディア。『君を溺愛している』って言えるかい？これまちがってない？」「『君を崇拜している』って言っても大丈夫？」 「君にどう言えばいいか、辞書で探したんだよ」わたしの心臓がわたしから跳びだす。(FBG, 147. 傍点筆者)

『私』が感動するのは、ヴァディムの翻訳への努力である。ロシア語から不完全な英語へと移動してきたヴァディムの内なる声が、その移動の途中での喪失、変化、ずれ、ぎこちなさにもかかわらず、アメリカ人である『私』の中の外国人に訴える力を持つのである。傍点の一文はヴァディムがロシア語の慣用句を英語に直訳したものである。

『私』はヴァディムが辞書で言葉を探すのを待ちながら、「彼の言いたい言葉が、彼が見つかる前にわかる」。(FBG, 152) 『私』はヴァディムの語法の間違いを直す。「あなたはいつでもわたしの言うことをわかってくれる。彼はいつもわたしにこう言う。あなたはいつもわたしの言うことをわかってくれる。やさしく、感謝をこめて。」(FBG, 145)

『私』はヴァディムの英語の教師というよりも、通訳者の立場に身をおいている。すなわち、『私』は一人の移民の翻訳者、そしてアメリカへの水先案内、アメリカとの仲介者の役割をしているのである。「彼の英語はブロークンかもしれないが、わたしが一緒なら大丈夫」。(FBG, 145) 『私』は言葉のうえで彼を世話 (care) する。『私』は言葉のうえでヴァディムの保護者である。道案内である。彼女が教える英語はアメリカの社会へのパスポートであり、仕事を見つけ、暮らしてゆく場所を確保するための必需品である。雛鳥に飛び方を教える母親のように、『私』はヴァディムに言葉を教える。

興味深いことに、『私』はヴァディムと自分の父親チャンを比べている。『私』への愛情を表現するために辞書で単語を探したというヴァディムの言葉に心を打たれた彼女は、「何年もあったのに、父はわたしに対する気持ちを伝えるだけの英語も覚えてくれなかった」(FBG, 147) と考える。まず最初に父親を棄てた娘である『私』は、そして続いて父親を亡くした娘である

『私』は、ヴァディムのなかに愛してくれる父親像を見いだしている。

事実ヴァディムにはスヴェトラーナという自慢の娘がいる。彼は娘の幸福を願い懸命に働く良き父親でもある。『私』はスヴェトラーナのことをあれこれと想像してみる。(FBG, 167-68) 家族、狭苦しいアパート、勉強し、奨学金を得て大学に行き、現在の暮らしから抜け出そうという野心、両親の不仲、想像のなかのスヴェトラーナは、公営住宅からバレエのレッスンに通っていた少女時代の語り手自身である。『私』は想像のなかでヴァディムの娘と自分を重ねあわせる。『私』は実は無意識のうちに身代わりとしてヴァディムと父娘の関係を結んでいるのだ。

『私』がヴァディムに翻訳者として保護の手を差し伸べるのは、彼とのあいだにこのような父娘の関係があるからである。『私』はチャンに与えることを拒んだ愛 (love/care) と庇護を、別の移民——家族を抱え、アメリカでの生存をかけて必死で働いている「父親」であるヴァディムに、身代わりとして与える。チャンの言葉を理解し、翻訳してやることのできなかつた娘である『私』は、外国人だった父を棄てた娘である『私』は、スヴェトラーナという娘の父親、ヴァディムの言葉を翻訳し、言葉のうえで彼を助けてやろうとするのだ。「チャン」の物語では、誰からも理解されない孤独な移民である父親の姿を書いた語り手は、「移民の恋」の章では、その父親に与えられなかつた愛 (love/ care) を、父親の身代わりに与える娘を描いているとも言える。翻訳とは愛 (love/care) すること、愛する者を理解し、その心を外に運びだして誰かの心にまで届けて (translate) やることなのだ。そして、そうすることによって『私』は、誰にもわからない言葉を話して亡くなった父親の喪失を埋めようとしている。

そして、『私』は身代わりの父親も失う。あるいはむしろ、自分から身代わりの父のもとを去る。ヴァディムがニューヨークの市街を自由にタクシーを走らせることができるようになり、翻訳者を必要としなくなったから。だが、『私』の愛 (love/care) がなかつたなら、彼はこれほど速く外国であるアメリカに自分の場所を確保することができただろうか？ ヴァディムの頭の

なかでは、英語を習得することとアメリカ定住に成功することが、英語の教師を恋人として獲得することと分かちがたく結びついていた。彼は、言葉と愛 (love/care) の関わりを誰よりもよく知っていたと言える。外国で生きてゆくためには翻訳者が必要である。翻訳してもらうためには、誰かの愛 (love/care) を得なくてはならない。アメリカ語は『私』から与えられた — 『私』から奪い取った (ravished) — 愛 (love/care) の忘れ形見である。これがなかったら、外国人である彼はこれから先、アメリカで生きてゆけるだろうか。

「移民の恋」、移民が愛する。移民を愛する。移民は父親であり、恋人である。物語のなかで、このような愛の形を再現することによって、『私』は恋人の喪失をも埋めようとしている。

そして、ヴァディムが翻訳家を必要としなくなると、彼が「もう口籠もったり言葉を手探りしたりしなくてもよくなり、自分の言いたいことがなんでも言えるようになるとき」(FBG, 164), 移民だったヴァディム自身が、少なくとも言葉の上で「アメリカ人」になるとき、「移民の恋」は終わる。『私』はヴァディムという外国人の言葉に、そのたどたどしい翻訳に、そして彼のブロークンな言葉を翻訳したいという誘惑に心を奪われた。心を奪われたのは、ヴァディムの言葉に揺すぶられた『私』の中のもう一人の『私』、とうの昔に捨て去ったはずの外国人だった。『神の息に吹かれる羽根』は、『私』が自分の中の外国人に目覚め、英語と外国語の二つの言葉の境界に身を置き、語ろうとして語ることでできない「外国人」の物語を翻訳する語り手となる物語として読むことができる。

スタテン島への帰還

何故私はルーエナと会い続けるのか。昔々私たちは同じ地域に住んでいた。それがそんなに大事なことだろうか？ほかに私たちに共通するところがあるだろうか？(FR, 32)

『ルーエナのために』で再登場した語り手『私』は自問する。『私』とルーエナ・ジンスキーは子供のころのある一時期、同時にスタテン島の同じ公営住宅に住んでいた。この時点で『私』はそのことの重要性に疑問を抱いているが、実は、これは『私』にとって、大きな意味のあることだった。そのことが次第に明らかにされてゆく。

本が始まる時、『私』はマンハッタンのアパートで一人で暮している。すでに2冊の小説を出版し、ある程度の成功を取めているし、また、大学の講義を持ってもいる。しかし、第3作は行き詰まり、中断してしまった。そのうえ、長い間一緒に暮らしてきた恋人Gと別れ、最近新しいアパートに越してきたばかりである。老いが忍び寄る予感もしている。ルーエナから手紙が来たとき、『私』はこのような孤独で不毛な時期にさしかかっていた。

一般の読者よりもかなり遅れて『私』の第1作を読んだルーエナ・ジンスキーは『私』に、幼いとき『私』と同じスタテン島の公営住宅に住んでいたこと、『私』を知っていることを告げる手紙を書いてくる。『私』はその名前にまったく心当たりがなく、作家としての義務感から儀礼的な感謝の手紙を出す。すると再びルーエナから手紙が届く。今度は会いたいという申し出の手紙だ。きっぱりと断ることのできない『私』は、しかしすぐにこの申し出に応じたわけではない。『私』はなぜかこの一読者が自分に何かを求めていると直感し、一種の危険を感じ取る。そこで「今は忙しいので1ヵ月ほどしたら」という婉曲な断りの手紙を出すのだが、相手は『私』の手紙を額面通りに受け取り、1ヵ月後、再び手紙を送ってくる。逃げ口上が効かないと悟った『私』は気が進まないながら、ブルックリンに住むルーエナの昼食の招待に応じるのである。「気が進まないままに、何かぼんやりとした不安を抱えて、やはり奇妙な義務感を重く感じながら、その上、腕には重いチョコレートムース・パイをさげて」(FR, 10) こうして、『私』とルーエナとの短い風変わりな付き合いが始まる。

『私』の予想通り、ルーエナには作家である『私』に頼みたいことがある。二度目に一緒に食事をしたときルーエナは切り出す。自分のヴェトナム戦

争の従軍看護婦としての物語を書くのを手伝って欲しいのだ。後で『私』に明らかにされることなのだが、それは彼女のヴェトナムでの経験談を聞いてくれる人が誰もいなかったからである。しかも、ほんの短い間だったが、ヴェトナムは彼女にとって青春だったばかりか、人生のすべてだったのである。ルーエナは自分がヴェトナムの話をするたびに、人が話題を変え、背を向けて行ってしまうことに気づいている。国内でのヴェトナム戦争への態度は反撥を通り越して、無関心になっていった。ルーエナは母親にさえも、話を聞いてもらえない。「あたしが話を始めるとお母さんは必ず臉をとじてしまうの」(FR, 187) このようにして、ルーエナは沈黙に閉じ込められている。『神の息に吹かれる羽根』のチャンのように。チャンと違ってルーエナは言葉に不自由してはいないし、また外見も美しいブロンドの大柄な女性である。料理に唯一の楽しみを見出すようになってからは、異常なほど肥満している。だがそれも聞いてもらえない話を内に抱えた孤独な姿である。

『私』はその頼みを断る。ところが、ルーエナは取り立てて失望した様子もない。以後『私』はときどきルーエナに会って、食事をしたり、ヴェトナムの体験談を聞いたりする。『私』には相手を自分の作品に使えるかもしれないという、作家としての打算があった。「私は彼女と本を書くことには関心がなかったが、彼女のことを何か使おうとはずっと思っていた。」(FR, 39) しかしそれにしても、長い間、ルーエナとの付き合いは、『私』にとっては、謎であった。『私』にとってルーエナは、現在の自分の暮らしとまったく接点のない人物だった。

私のほとんどの友人にはルーエナのことを語っていなかった。彼女を誰にも紹介しなかった。彼女のことを紹介しようかと思うたびに、自分の友人がどんな人たちだったか思い出してしまった。あの人たちの批判がましいことといたら。気取っていることといたら。(中略) 自分たちと違う人にはひどく無関心だ。(中略) なんとしょっちゅう人のことを退屈だ、面白くない、頭が悪いと言っていることか。そういった言葉はみな、人

が自分たちの仲間ではないという意味なのだ。(FR, 39)

またルーエナのほうも、『私』の友人をも含めてマンハッタンのことを「お高くとまっている」(snotty)と嫌っている。

ルーエナは本のことは二度と口にしない。にもかかわらず『私』はルーエナが口に出さずに何かを求めているという感覚を拭い去ることができないでいる。

私がルーエナと会うのを楽しんでいたかと尋ねられたら、「ええ」と言う前に、私は少なくとも少しためらうだろう。私は彼女が何かを求めているという感覚を拭い去ることができなかった。私が彼女に借りがあるということ、彼女と付き合っているといつか面倒なことになるという感覚、これは理屈に合わないことだったが、消し去ることができなかった。(FR, 33)

そして、その曖昧な——曖昧であるがためにいっそう大きい——不安にもかかわらず、『私』はルーエナに惹きつけられている。

彼女と会うと、たいてい私は動揺した。彼女と会うと、時には気が滅入った。にもかかわらず、こういうことにかかわらず、私は彼女と会いたくないとは思えなかった。少なくとも私のどこかで、私はいつも彼女に会うことを楽しみにしていた。でも何故だろう？ (FR, 32-33. 傍点筆者)

この不安と魅惑の入り混じった気持は何に由来するのだろうか？この相反する気持を考察する上で、ルーエナと食べ物の結びつきは大変興味深い。ルーエナを初めて訪ねた時、ルーエナはおびただしい量のご馳走を作って『私』をもてなす。詰め物をした鶯鳥の丸焼き、それにかけるグレーヴィーソース、マッシュポテト、グリーンピース、コーンブレッド、一食分は充分にありそうなほどのオードブル、『私』はルーエナが早朝から起きて支度をし

たのだらうと推測する。ルーエナは料理が好きで、自分では食べきれないほどこしらえては、同じアパートに住むお年寄りや教会に配るのだと言う。『私』は「お腹の中で嘲った。いや、嘲ったというのは言いすぎで、ルーエナに向かって首を横に振っていたのだ」。(FR, 14) 一方で、ルーエナの食物への関心、その熱意、ルーエナの肥満（超エルサイズである）、善良さを軽蔑とまでは行かなくても冷ややかに見る『私』がいる。それはかつて食べ物「一旦食べたなら何に変わるか想像した」少女、食べ物を嫌悪した少女が成長した『私』である。ルーエナが「snotty」と言って嫌悪するマンハッタンの人々の仲間入りをしている『私』である。（『私』が手土産に持っていったチョコレート・ムース・パイもルーエナから見れば「snotty」だったのではないだろうか。）だがその一方で、『私』はその量に圧倒されながらも、美味しいと思い、よく食べる。『私』はその晩夢の中で、冷蔵庫に首を突っ込んで、残り物をむさぼっているルーエナの姿を見る。ルーエナと食べ物との結びつきは、『私』がアメリカ人になるために棄却した命に関わる（命を養い育てる）部分を象徴している。そして命に関わる部分とは、ルーエナによって蘇ったスタテン島の公営住宅、その外国人性であった。外国人性——ルーエナを訪ねてブルックリンに着いた『私』がまず接するのは、英語を話せないポーランド系移民だった——。

いうまでもなく、スタテン島やブルックリンの移民の家族が皆大食で肥満しているというのではなくて、『私』の場合すでに述べたとおり、故郷、ホーム、すなわち外国人性を棄却したいという願望の一つの象徴として、食物に対する嫌悪があったということである。その嫌悪感には少女の頃のように顕在するものではないが、『私』はそれをどこかに隠し持っているのである。そしてそれは、ヴァディムやチャンの物語を書いた——語ることのできない外国人のための翻訳の本能に目覚めた——『私』と共存する、『私』の中のもう一人の『私』、アメリカ人である。だが、『私』がルーエナの料理を食べたということは、ルーエナが象徴する別の世界、アメリカの周辺に位置するアメリカの中の外国に足を踏み入れ、抜き差しならないほ

どに、そこに取り込まれてしまったことを意味するのではないだろうか？『私』はスタテン島へのフェリーの乗客を、黄泉の国に運ばれる魂にたとえる詩を思い出している。(FR, 44-45)『私』はペルセポネーのように、黄泉の国の食べ物を口にしてしまい、戻って来られなくなってしまったのではないだろうか。またしてもアメリカの中の外国を、畏怖し嫌悪する比喩ではあるが。⁷

二人の接点であるスタテン島、『私』はその意義も疑っている。『私』もルーエナも何年もそこに戻っていない。いったん後にしたら、もう滅多には戻らないところなのだ。そこは、満ち足りた幼年時代の思い出の土地というわけではない。ルーエナにとっては、父親の暴力に怯えながらシンデレラのように働かなければならなかった少女時代の土地である。ルーエナはここから出るために看護婦の道を選んだ。看護婦になるための教育費を給付して貰うため、ルーエナはヴェトナム戦争の従軍看護婦になったのだ。また『私』にとっても、両親の不和、恒常的な母親の不満、家を出てゆくという母の脅し（その脅しの奥には「自殺する」という脅しが見えていた）、子供たちに愛情をもたない小学校の教師、挫折した夢の土地である。だが、公営住宅の記憶は、捨て去ることができない。

成長してからのルーエナは、子供時代のことは考えないようにしていた。思い出が心に浮かんでくると、——たとえば眠ろうとしているときなど——何故か、どこからともなく思い出が押し寄せてきて、追い払うことができないのだった。そして驚いたことに、思い出がもたらすものは愛情と屈辱の入り混じった感情だった。(FR, 104)

何年ぶりかで独りでスタテン島を訪れた『私』は、フェリー乗り場の汚さに叫びだしたい気持ちに襲われ、帰りのフェリーが来ると、そそくさと乗り込んでしまう。しかし、フェリーでマンハッタンに戻るとき、私の心は「何かし残した仕事があるような」漠とした不安にふさがれる。(FR, 70) そこに

はもう、家族も友人も住んでいない。用がないばかりでなく、『私』にとってそこはむしろ嫌悪の情を覚えさせられるところである。だが、決して捨てることのできない彼女の存在の一部でもある。『私』もスタテン島の公営住宅にたいしてルーエナの「愛情と屈辱」の入り混じった感情を共有しているのだ。『私』もルーエナも公営住宅に育ったアメリカ人という「外国人」をその魂の奥に抱いているのだ。

であれば、『私』がルーエナに会うのを止められないのも、会うと動揺するのも、説明がつく。ルーエナが『私』の中にいるもう一人の『私』である外国人に訴えるからだ。その『私』に、自分の物語を語って欲しいと、自分では語ることのできない物語、自分の中に生き埋めになっている物語を運び出して伝えて欲しいと (translate) と訴えるのである。翻訳の誘惑に、『私』の中の外国人は動揺し、魅惑され、恐れる。だが、『私』がそのことに気がつくのは、ルーエナが亡くなってからである。⁸

『私』が気付くのが遅かったのに対して、ルーエナのほうは、当初から『私』の中の外国人、その語り手としての本能と能力に勘付いていたのである。「あの日あんたの本を見つけたのは神様の思し召しだって思うのよ」とルーエナは言う。(FR, 39) そして『私』に手紙を書いたとき、彼女は『私』が自分の呼びかけに応じてくれると確信していた。ルーエナは『私』の体のいい断りが通じないほどナイーブだったのではなく、『私』が自分のもとにやってくる(おびき寄せられて)、自分の話を聞き、いつか自分の代わりに自分の物語を書いてくれると、そういうふうに誘惑することができるとわかっていたのだ。初めてルーエナのアパートを訪ねた夜、『私』の夢の中に現れたルーエナは、心優しい羊飼いの娘の姿で何度も『私』に手招きする。翌朝『私』はその彼女の仕草が、自分をアパートに招き入れる時のルーエナの仕草と同じであることに気づく。その青い目には「さしせまった」色を浮かべていた。(FR, 29)

ルーエナの死後、『私』が思い出す彼女の表情の一つは、その最初に会ったときのものだった。

ルーエナに最初に会ったとき、何故軍隊に入ったのかとたずねると、ルーエナは奇矯なことをした。両手で頭を抱えて、口をあげ、大声で叫ぶ真似をしたのだ。(FR, 17)

ムンクの「叫び」という絵のようなポーズのルーエナ、(ルーエナはあの絵の人物のようにこけた頬をしてはいないが)、『私』の記憶に焼きついたそのイメージは、『私』の中の通訳者に働きかけ、物語を書くようにとせかすのである。『私』はその声にならない叫びに言葉を与えずにはいられない。『ルーエナのために』は、ルーエナの物語であると同時に、『私』がルーエナに見込まれ、誘われ、さらにはせかされてルーエナの語り手になるまでの物語でもあるのだ。自分自身、そのうちに外国人を抱える『私』は、第1作から3作まで形を変えながら自分では語ることのできない「外国人」のための通訳／とりなしをしてきた。そして、ここ『ルーエナのために』では、ルーエナによって自分の原点であるスタテン島の公営住宅へと立ち戻った『私』は、自分のなかにいる外国人にめざめ、再び、語ることのできない人のための通訳／とりなしの作業を行なう。第1作の『私』がチャンやヴァディムに対してそうだったように、ここでも物語ることは愛 (love/care) することだ。そしてルーエナへの愛によって、『私』自身孤独で不毛な時期をくぐりぬけ、語り手として再生するのである。

注

1. Nunez, Sigrid, *A Feather on the Breath of God* (New York: Harper Collins Publishers, 1995) 本論ではこの作品は *FBG* と略記する。その後の数字は本書の頁数を表す。本書については、「翻訳の誘惑——アジア系アメリカ作家紹介 (1)」(杉浦悦子, 『湘南国際女子短期大学紀要 第4号 1997年』)において、移民二世である語り手『私』の物語を言葉の側面から読み、両親の言葉と自分自身の母語、英語とのあいだに身を置き、両者の翻訳者として目覚めてゆく過程として、この作品を読むことを試みた。
2. Nunez, Sigrid, *Naked Sleeper* (New York: Harper Collins, 1996)
3. Nunez, Sigrid, *Mitz: The Marmoset of Bloomsbury* (New York: Harper Collins, 1998)
 本書については「アジアから世界に／世界から私に：Sigrid Nunez の, *Mitz: The Marmoset of Bloomsbury*」(杉浦悦子, 『ディアロゴス』5号)参照。本論ではヴァージニア・ウルフ、レナード・ウルフ夫妻が飼っていたブラジル産のキヌザル、ミッツの擬似伝記である本書について、異国にある小さな稚けない生き物、言葉を話すことができない者という意味で、第1作の延長線上にある作品として捉え、しかも、アジア系アメリカ作家の枠を越えて、より普遍的な世界に自分の書き物を広げようとする姿勢の現れとみなす。そして、このような「外国人」の言葉を理解し、それを外に伝える手助けをすること、彼／彼女にとって見知らぬよそよそしい世界への道案内となり、世界との仲介者、とりなし役をすることが、語り手の愛 (love/care) の表現であり、その役割であると結論する。
4. Nunez, Sigrid, *For Rouenna* (New York: Farrar Straus Giroux, 2001) 本論では以下, *FR* と略気し、この本からの引用の後の () のなかの数字はこの本の頁数を表す。本書については、「Sigrid Nunez の *For Rouenna* : 通訳／とりなし——アジア系アメリカ作家紹介 (6) ——」(杉浦悦子『湘南国際女子短期大学紀要 第10号 2003年』)参照。
5. ビンゲンのヒルデガルド (1098 ~ 1190) は、1140年代末、教皇宛ての書簡のなかで、自分の著書『スキヴィアス』について比喩的に「かの王はささやかな羽根にふれて、それが奇蹟のうちへと舞い上がるようおぼし召されました。一陣の強い風が落ちぬよう運ぶようにと」書いている。種村季弘『ビンゲンのヒルデガルドの世界』(青土社 1994年) 81頁。『私』はここで聖女ヒルデガルドの暗喩を使い、パレエ

を踊る肉体を霊的なものにまで昇華したいという願望を表しているものと思われる。またそこには、神、すなわち力を持つ父の愛と庇護への願望も読み取ることができる。

6. 「キモノ」をアジア系の衣服の総体として捉え、日本人も中国人も区別する必要を感じていないところに、ポーシャの母親のパターン化された外国人への見方が伺われる。
7. とはいうものの、冥界の王ハデスの妻となったペルセポネーは、そもそも穀物の女神であり、食物に関係している。また1年の半分は冥界で過ごし、春から秋にかけての残りの半分は地上で過ごすという取り決めは、彼女が四季の移り変わりとともに成長し、実を結び、大地に種をこぼす穀物を象徴していることを示している。冥界は死者の世界であると同時に、再生の土壌でもある。プルフィンチ作 野上弥生子訳 『ギリシャ・ローマ神話 上』(岩波文庫 東京 昭和42年) 78頁

M Grant & J.Hazel, *Who's Who in Classical Mythology*, (New York: Hodder and Stoughton, 1979), P.278

8. 『私』とスタテン島の故郷、すなわち彼女の外国人性ととの関係は、クリステヴァが『外国人 我らの内なるもの』で語る「我らの内なる外国人」のあり方とのあいだに、私はためらいがちではあるが、細い線を引くことができると考える。クリステヴァは彼女の本の中で、フロイドの「不気味なもの」について興味深い解釈をしたうえで、次のように記している。

私たちが外国人に魅惑されながらも拒絶してしまう感情には、少しばかり「不気味」の感覚が入っている。そこにはフロイドが指摘するように、「人格を破壊してしまうもの」があるという意味で。そしてそれは、私たちの他者——死という他者、女という他者、抑制しきれない衝動という他者——に対する未熟な欲望と恐れを再燃させる。外国人は私たちの中にいる。そして、私たちが外国人から逃げたり、外国人相手に格闘したりするとき、私たちは自分の無意識と戦っているのだ。本当の自分というありえない存在の中の異質な側面と戦っているのだ。(191)

クリステヴァは、フロイドの精神分析の見地から、無意識というもう一つの自分、自らの他者性ということを推し進めると、人類は全て自分の中に他者、すなわち外国人を住まわせているということになり、「精神分析学の倫理はこのような政治性を意味している。いわば新しいコスモポリタニズム。それは政治機構、経済、通商を横断

し、人類に役立つ。人類の連帯とは、自らの無意識——欲望し、破壊し、恐れ、空虚で、手におえない——を自覚することのうえに成り立っだろう」（192）と結論している。一方、ヌネの語り手の場合には、外国人のありかたをそこまで一般化することはできない状態である。クリステヴァが彼女の本の大半を費して扱っている具体的な外国人の問題に、ヌネの語り手は深く根を張っており、「精神分析学のコスモポリタニズム」によって「外国人」というものが「固定化され」特殊なものとして排除されなくなる理想郷が実現される以前のアメリカの現実、難民や移民などの越境者が絶えない世界の現実根ざし、引き裂かれる自己に苦悩している。

Kristeva, Julia, Translated by Leon S Roudiez, *Stranger to Ourselves* (New York: Harvester, 1991), PP.191-192.

Sigrid Nunez: A Foreigner in ‘I’

Etsuko Sugiura

Sigrid Nunez, the author of three books, *A Feather on the Breath of God* (1995), *A Naked Sleeper* (1996), and *Mitz: A Marmoset of Bloobsbury* (1998), published her fourth book *For Rounenna* (2001), which she begins with a reference to her first book.

After my first book was published, I received some letters.

Thus referring to her first book, Nunez tells us that the narrator of her fourth book is the same person with that of her first book. Though Nunez left Staten Island in her second and third books and took Manhattan or London as her terrains, she returns in this book to Staten Island, where she had begun her narrative in *A Feather on the Breath of God*.

The first section of my essay will focus on the descriptions of the housing project in Staten Island in both books. It is a residential area for those who are not yet accepted into the States for several reasons respectively, including immigrants who have just arrived. Almost all the people who live there share one feeling, a feeling that they do not belong where they exist. They feel that they are not in the right place, and that they are on their way from somewhere else to somewhere else, in short, a feeling of moving, of homelessness, of diaspora.

On the other hand, for people outside the project, it is also a mistake.

They never tread into it, let alone go across it. They will go around it however long it might take. They, the people outside, can somehow distinguish the residents of the project from other Americans. By what brand, by what mark can they tell the people of the project from the other Americans? People of the project are strangers, outsiders, aliens for them. They live in the States, some might have a green card, some might have an American citizenship, but they are still foreigners in America and thus Staten Island is symbolically a foreign country inside, or rather, at the heart of, America.

Out of Staten Island, 'I' the narrator tries to escape into Manhattan. The second section of this essay will focus on "A Feather on the Breath of God", the third chapter of the first book, in which 'I' is dedicated to a ballet. This chapter can be read as a memory of a phase in the process of growth in which 'I', the girl who has an American citizenship as a birthright and speaks American English as her mother tongue, has to cut off and cast off her foreignness rooted in her existence in order to be an American.

What 'I' finds in the world symbolized by a ballet is a way by which to go out of the world of reality and to be accepted into another world. The former world is associated with her parents, foreignness and Staten Island, and the latter with art, America and Manhattan. While the former is associated with order, beauty and purity, the latter with a chaos, a squalor, and impurity.

It is suggested that what she is trying to discard is something vital to her, something closely connected to the core of her life by the fact that her dedication to ballet includes abhorrence to eating. She persuades herself not to eat by emphasizing the repulsiveness of food imagining what food turns into once eaten and digested. And the very state of chaos, ambiguity

and impurity of food once in our body is precisely the metaphor of foreigners with their ambiguous identities, belonging to plural or no countries, with languages imperfect and scattered with so many loan words and imperfect grammar, the foreignness woven into the texture of her life. As she consciously hates and refuses food, so she abominates and rejects the foreigner in herself, in order to be an American, in order to leave the housing project in Staten Island which symbolizes a foreign country inside America.

However, when she grows up to be an English teacher for immigrants, that other self, that foreign self, which is supposed to have been cast off in her puberty, still abides in the depth of her heart, though oppressed, hidden even to herself. That is why 'I' is so ravished by a Russian immigrant, who is not only married but also a villain, almost a criminal, once suspected of a murder in his old country. If it had not been for that other self, she would not have been so attracted by him or by his language. *A Feather on the Breath of God* depicts the process in which 'I' meets her other self, which leads her to write lives for those who cannot write themselves. The third section of my essay will explicate how through her love for a foreigner who reminds her of her own father she gets awakened to her instinct for translation as an act of mediation between foreigners and other people.

For Rouenna, Nunez's fourth book, is a short biography of a daughter of Polish immigrants with whom 'I' shares some period of childhood in the housing project in Staten Island, but at the same time, it is a story of Staten Island itself. Or rather a story of leaving and returning Staten Island.

'I' is now writing in Manhattan. She hasn't been to Staten Island for a long time. Though it is a home she had discarded many years before and which she has to abhor and reject, she, strangely enough, shares with Rouenna a mixture of shame and love for that place. The fourth section of

this essay will follow the process how Rouenna enables 'I', who has been leading a lonely and sterile life, revives as a narrator.

The vague uneasiness and fear and irresistible attraction 'I' feel toward Rouenna derives from the memory of her past revived at her advent, the foreignness she once cut off and threw away in order to be an American. Rouenna appeals to the foreigner who lurks inside 'I'. This is suggested by the Rouenna's connection with food. Rouenna urges the foreigner to write her story because she cannot write it herself, to carry it out of her body and convey it into the world. It is not until after Rouenna's sudden death that 'I' realizes the significance of their relationship, when her love for Rouenna makes her to return to Staten Island and thus enables her to revive as a narrator after a long sterile period.

